

令和二年度
名寄市立大学
推薦入試・社会人選抜

小論文問題

試験時間 一〇時〇〇分～一一時三〇分（九〇分）

*受験上の注意

- ① 指示があるまで開いてはいけない。
- ② 指示に従って、静粛に行動すること。
- ③ 机上には、受験票、筆記用具、消しゴム、鉛筆キャップ、鉛筆削り、時計、眼鏡、目薬、袋・箱から出したティッシュペーパー以外、不要なものは置かないこと。
- ④ 質問、用便その他、特に必要のある場合は黙って手を挙げ、指示を求めること。
- ⑤ 不正を行ったものは試験を中止し、以後の受験資格を失うものとする。

次の文章を読み、あとの間に答えなさい。

一九九〇年代になって、バブルが崩壊すると、日本経済は長期的な不況にあえぐようになる。社会全体にしだいに閉塞感が漂いはじめ、人々の間の経済的格差も拡大した。

時代は、新自由主義とも言われた「競争原理」と「自己責任」の全盛期でもあった。ここでは、経済の好循環への転換のためには、何より競争が必要であるとされ、会社にも個人にも自己責任でリスクに対処することが求められた。

しかし、その結果、富の集中する者が登場する一方で、社会の底辺では、貧困の問題が深刻化していったのである。

さすがに、こんな時期である。八〇年代のように、「個性」や「夢」をあおりたてる社会的風潮は、しだいに影を潜めていった。その意味で、かつてのように、あっけらかんと「夢」や「希望」を語る若者も少なくなっていた。

ただし、政治の世界や経済界からすれば、若者たちの上昇志向の衰えは、困った事態でもあった。

なぜなら、経済が停滞している時期であるからこそ、チャレンジ精神を持ち、自らリスクをとって果敢に行動できる人材——「アントレプレナーシップ（起業家精神）」にあふれた人材の登場が待たれていたからである。そんな人材が、新産業や新事業の創出を担い、日本経済を活性化させてくれれば……。これが、当時の政治家や財界人の思惑であった。

しかし、実際には、この時期の若者たちの大志は総じて縮みかけており、むしろ堅実志向を強めてもいた。なぜなら、かつては憧れの的であったフリーターも、今では低賃金の「使い捨て労働者」の代名詞にまで成り果てていたのだから。

僕の睨むところでは、日本社会において、大人が子どもや若者に「夢」を押し売りするようになったのは、まさにこうした時代状況においてだ。

最初にそれを言い出したのは、政治家や財界の重鎮、そして企業の経営者たち。日本社会と経済の「閉塞」を打破するために、「若者たちよ、もっとしっかりせよ!」「夢を持って」「夢をあきらめるな」と。

実際、一九九〇年代後半から二〇〇〇年代にかけての時期は、高卒でも大卒でも、かつてのこの国が経験したことのないような就職難が続いており、非正規雇用で働く若者の数も急増していた。また、新卒で就職できても、すぐに離職してしまう若者が、かなりの割合にのぼってもいた。

政治家や経営者たちが考えたのは、働く意欲に乏しい若者が増えてしまったから、就職難や非正規雇用の増大が起きているのだという、彼らにとって相当に都合のよい「解釈」だったと言ってよい。

だから、若者に「将来やりたいこと」や「就きたい職業」、端的に言って「夢」を持たせれば、それが働く意欲の回復につながる。そうすれば、就職難や非正規雇用の問題も解決に向かうと夢想したわけである。

しかし、冷静に考えれば誰にでもわかるように、若者の就職難や非正規雇用の拡大という問題は、第一義的には企業の側の採行動向の変化——あけすけに言ってしまえば、正社員の採用を絞って、不足分を非正規社員で補っていくという雇用戦略への変化——に端を発していたはずである。そこに、若者の意欲や能力の問題が絡んでいるとしても、それだけに責任転嫁できるものではない。

また、早期離職の問題も、競争が激しくなる中で、正社員の数が減らされている職場環境の厳しさという問題と、若者の側の問題が重なるところで生じているはずである。

その意味で、若者の耐性のなさや意欲の欠如に原因を求めるのは、明らかに一方的であり、的はずれな発想と言うほかない。

にもかかわらず、二〇〇〇年前後の社会的論調は、若年の就労問題が深刻化している原因を、若者自身の意識や能力の問題に求めるという、「若者バッシング」の論理に傾斜していた。日本では二〇〇四年頃に初めて登場した「ニート」（統計上、通学も、就労も、求職活動もしていない若者を指す）という言葉が、瞬く間に社会に周知され、「最近の若者は困ったものだ」といったニュアンスで認知されていったのは、まさにその証拠であろう。

実は、こうした「若者バッシング」の風潮に押され、そして、政治家や経営者たちの声に耳を傾けることで登場したのが、何を隠そう、文部科学省による「キャリア教育」の推進という政策なのである。

ここに至って、一九八〇年代の「夢」を賞賛する社会的風潮は、九〇年代以降における「夢を持つ」という政治家や企業経営者たちのメッセージを経て、子どもや若者に「夢」を持たせることを教育の目的とする段階にまで到達する。言ってしまうえば、「夢を強迫する社会」の基盤が整えられたのである。

（「夢があふれる社会に希望はあるか」 児美川孝一郎著 KKベストセラーズ 二〇一六年より）

問一 筆者は、傍線部で「働く意欲に乏しい若者が増えてしまったから、就職難や非正規雇用の増大が起きているのだ」という「政治家や経営者たち」の考えは、「彼らにとって相当に都合のよい『解釈』だった」と述べている。その理由はなにか、二〇〇字以内で説明しなさい。

問二 現代社会では、子どもや若者に対して「夢」を持つことが強迫されているという筆者の主張に対して、あなたの考えを六〇〇字以上八〇〇字以内で述べなさい。